



荇田小だより

横浜市都筑区荇田南町 6 9 4 番地 [Tel.911-0149]

荇田っ子のみなさん がんばったね！ ～コロナ禍での令和3年度運動会～

校長 伊藤 智樹

令和3年度の運動会が10月30日に無事終了しました。保護者の皆様には運動会実施にあたりご理解とご協力を頂きありがとうございました。夏休み明けの緊急事態宣言延長に伴う分散登校、様々な教育活動の制限がある中どのような形で運動会を実施すべきか教職員が議論を重ねた最適解が今回の運動会でした。夏休み前、高学年の子どもたちに運動会のイメージについてアンケートをとったことがありました。そのアンケートには楽しさ、競技性など子どもたちが抱く運動会のイメージがありました。

【運動会実施にあたっての本校の基本方針】

- ① 本市ガイドラインに基づく感染症対策
 - ・練習時間短縮 ・開催時間短縮 ・外での昼食制限 ・参観者の三密対策 等
- ② 子どもたちが抱く運動会のイメージを大切にしたい。
- ③ 運動会の競技性、盛り上がり、一体感を大切にしたい。
- ④ 子どもたちに活躍の場の保障と「やり遂げた」という成就感を味わって欲しい。

例年なら7週間ほどの準備期間が今回は4週間となり今まで以上に短期間に仕上げる必要がありました。特に高学年は、様々な役割分担があり休み時間もその準備時間にあっていたので大変だったと思います。子どもたちは一生懸命に頑張っていたと思います。

人を励ます言葉として、よく使われる「がんばれ」。使い次第で、逆効果になるケースもあります。右の言葉はコロナ禍で大変な状況下にあった施設職員が濃厚接触者として自宅内隔離になった時に幼い娘さんがお父さんに書いた手紙の言葉です。この言葉で気持ちが軽くなったそうです。「がんばったね」という言葉にはその人が今まで行ってきた取組を認めるとともに不安な気持ちを緩和する働きがあると思います。

「おしごとたいへんだったね がんばったね」
終わりが見えないコロナ集団感染
 …神奈川の施設職員を支えた娘の言葉
【東京新聞 WEB 2021年2月25日】

かつて幼かった息子が「じょうずに書けているね。」と励ましてくれた言葉を「あめ玉を口に含むように」思い出しながら、書き続けた。

【朝日新聞 2021年11月2日 朝刊】

秋の褒章の受章者でもある小説家小川洋子さんのインタビューが新聞に掲載されていました。左の言葉はその内容です。小説を書くという取組を子どもの視点から認めてくれて、その言葉を糧に小説を書き続けた点で「がんばったね」と同じ働きがあると思います。

私は今までの運動会に向けた様々な取組そして運動会本番当日の姿を見て荇田っ子の皆さんには「がんばったね」「すばらしかったね」と声をかけたいと思います。その頑張った姿に「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。

先月号の学校だよりの中でも「リアルの価値」について書かせて頂きました。今回のような運動会という臨場感のあるリアルな教育活動は、教育の目的である「人格の完成をめざす」観点からとても重要な位置付けになります。感染症対策をしながら、子どもたちに活躍の場の保障と「やり遂げた」という成就感を味わえる教育活動を引き続き取り組んでいきたいです。

